

# 知識探訪

多民族社会の横顔を読む  
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

## マッサージとお産婆さんの系統（クトウルナン）

井口由布（立命館アジア太平洋大学）



読者の中には、マレーシアのリゾートホテルでマレーの伝統的なマッサージなどというものを体験したことのある方もあるだろう。私はこれらの伝統的マッサージというものを、基本的には観光産業による捏造か伝統の創造なのだろうと思ってきた。確かに多くの場合はそうなのだろうが、まったくの捏造かという

とどうもそうでもないのではないかと。ここ数年行っているお産婆さんへの聞き取り調査の中で、これまで見えなかったことが見えてきた。私の最近の研究テーマはマレーシアにおける女性の身体とセクシュアリティに関することで、その一環としてお産婆さんへの聞き取りを行うこととなった。日本語では、ジェンダーの問題なども踏まえて助産師という用語を使うが、マレー語でいう「bidan」は訳語のニュアンスとしては産婆なのではないかと考え、ここでは産婆という言葉を使いたいと思う。

お産婆さんたちの仕事は、出産の介助だけでなく、トゥンク（tungku） 出産後のマッサージ、出産45日後の清めの儀式、赤ん坊の髪を切る儀式（cukur rambut） スナット（女子割礼）などである。お産婆さんの仕事の大きな中心は、今では出産した女性へのマッサージである。「産婆」といえば出産の介助が最も中心的な仕事ではないかと考えられるが、マレーシアの農村でも自宅での出産は少なくなっている。だが、産後の女性へのマッサージはまだまだ大きな需要がある。そこでマッサージだけを行うお産婆さんというのもあるようだ。

上に記した「トゥンク」もマッサージの一つである。トゥンクは鉄製の道具で、これを温めてヤエヤマアオキ（mengkudu）の葉、もしくはマレーのハーブであるウラムを敷いた布でくるみ、マッサージしたいところをこれで押すのだそうだ（写真参照）。ペナンでの聞き取りでは、出産後

に子宮を小さくする効果があるという。

私がインタビューをしたのは、マレー半島北部のペナン州やクダ州で活動するお産婆さんたち10名である。病院などで正式な訓練を受けたお産婆さんは1人だけで、残りは全てお産婆さんだった母親や祖母からその技術を受け継いだと言っていた。彼女たちはよくお産婆さんのketurunan（系統）があるという言い方をしていた。その意味では、お産婆さんたちの世界は縦のつながりが強力なのである。

お産婆さんたちには横のつながりはほとんどなく、隣の村のお産婆さんぐらいまでなら知っているが、それ以上はわからないようだ。政府による登録制度や協会などもなく、調査でインタビュー相手を探すのはなかなか大変だった。私がインタビューをしたお産婆さんたちの年齢は63～83歳と高齢であった。母や祖母から技術を受け継いだ彼女たちは、次の世代へ自分の技術を継承しようという意志はあるが、自分の娘や孫たちは興味をもっていないと言っていた。お産婆さんたちの縦のつながりも時代とともに失われていくのだろう。そんなふう思いながらカンボンでの調査を終えて町へ戻ってきた。

帰国前にペナン島のちょっとしたホテルへ行き、スパでのマッサージを予約した。そこでマッサージをしてくれた若い女性の施術者に、私はカンボンでお産婆さんにインタビューをしたことをなんの気なく話した。するとその女性が「彼女は私のおばあさんだ」と言うのだ。もう一人のマッサージ師の女性も自分の祖母も母も村ではお産婆さんをやっているという。20代の彼女らは村で伝統的な産婆をするという道は選ばなかったが、町のホテルでマッサージ師をしている。どうやらお産婆さんの系統（keturunan）というものは今でも続いているらしい。さて、私が受けたマッサージはマレーの伝統と関係があるのか不明ではあったが、とても気持ちのよいものだった。

### < 筆者紹介 >

立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部教授。東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程終了、博士（学術）。専門はマレーシア研究、カルチュラル・スタディーズ。最近の研究テーマはマレーシアにおける「女性器切除」問題をめぐる女性の身体とセクシュアリティについて。